

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

## 車椅子と回遊動線

「今は車椅子で家の中を移動しています」とおっしゃる方の家に伺った。

六〇代後半になられたオーナー社長が、子供達が泊れる部屋と、ご自分が自宅でも仕事が出来る部屋をと、二部屋を増築した方の話だ。七〇歳を過ぎ、八〇歳になっても現役社長を務め、アクティブシニアとはこの方のことだと思っていたのだが、九〇歳を過ぎ、足腰が弱り車椅子生活となった。

増築した部分はともかく、当時に築四〇年になっている家の、住みながらの改装では、徹底したバリアフリー化は出来なかった。だがいづれ一階を寝室に変えられるようにと独立していた和室を洋室に変更して、リビングと繋げておいた。

そのおかげで、八〇歳代になられても、一階に寝室を移動しただけで時々泊りにくる子供や孫との会話を楽しむ生活だった。また九〇歳になっても、近くに住む長男一家の助けで二人での暮らしは穏やかに続いていた。自宅から五分ほど離れた近居している子供家族

あつての暮らしだが、ご自身や奥様が入退院を繰り返すうちに、だんだん事態が変わってきたようだ。

家の中の車椅子使用を考えたリフォームは多い。

「車椅子になるかどうか分からないけど」と、笑いながらおっしゃる方もいるのだが、転ばぬ先の杖というお気持ちでリフォームをなさるので。転ばないに越したことはないのだが、家庭内事故の半数を占める家での転倒・転落は、誰にでも可能性は大いにありうることだ。

今回お伺いし、実際に車椅子での移動を見て頂き、私自身も車椅子をお借りして動いてみた。それは驚くほどスムーズで、速い昔の実験ハウスでの体験と違い、車椅子の軽量化も進み、確かに九〇歳になっても操作出来そうに思えた。

ところが、もともと車のバックを不得手とする私は、「そこからはそのままバックですよ」と言われても、うまくいかない。くねくねと蛇行するうちに、内輪差を忘れての走行では行き詰ってしまった。やっと廊下を抜け出したものの、

玄関ホールからたたきに落ちそうになってしまった。

人が動く動きの道を「動線」というが、最近のプランニングでは引き返さなくても次に行ける「回遊動線」を計画することが多くなった。これなら前へ前へと進んでいるうちに元の場所に戻れる。車椅子はもちろんだが家の中を普通に歩くだけでも、振り返って引き返さないと動線ができていれば、転ぶことへのリスクはだいぶ回避されるだろう。

平均寿命で世界一、「百寿者」が六万人を超えた日本である。床をフラットにしておくことはもちろん大事だがそれだけではなく、同時に「回遊動線」を作り出すリフォーム計画を常に念頭におきたいものと改めて感じた。そしてそのための面積確保には廊下を取り込みながらのワンルーム化も一つの方法だろう。

自宅で最後まで過ごしたいという思いをどなたでもお持ちだと思うが、そのためには、自身の健康だけでなく、ここで暮らし続けるというための設えと、何となくでも本人の前向きな気力だと痛感した。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。